

RCE インジェ（韓国）が有する ESD（持続可能な開発のための教育）の特徴

—北九州 ESD 協議会との交流を通しての理解—

三宅博之 宋珉鎬
(法学部政策科学科) (北九州市立大学・
久留米大学非常勤講師)

キーワード

ESD RCE インジェ 北九州 ESD 協議会 スタディツアー 交流

要旨

2005年から2014年までの10年間実施された国連持続可能な開発のための教育の10年（UNDESD）が終了したものの、ESDは持続可能な開発目標（SDGs）の第4目標として、また、ユネスコのGAP（Global Action Program）として世界各地で継続実施されている。北九州市では、北九州ESD協議会の下で2006年からESDが実施・展開されてきた。なかでも、そのESDの活動の特徴の一つに韓国のESD地域拠点（RCE）との持続的な国際交流がある。韓国内にはRCEは5つあるが、それぞれ違った特徴を持っている。残念ながら、韓国のRCEの特徴は邦語で表わされていないので、日本人の大半はそれらの特徴を知らない。今後のESDの方向性や国際交流を見据えた場合、どのような特徴を持っているのかを知ることは非常に重要である。今回、ESDつながりで江原道インジェ郡に研修旅行（スタディツアー）をする機会を得たことを契機に、RCEインジェがどのような特徴を持っているのか、通常の文献と研修旅行で得た観察・インタビュー・アクティビティ体験などをつうじて、平和教育と生命（命の）教育に焦点を置いているRCEインジェのESDの特徴をとらえてみた¹。

¹ 本稿の執筆について、はじめに、第1章、第3章とおわりに、の部分は三宅博之が、第2章については宋珉鎬が担当した。

はじめに

今年元日の新聞に、2016年12月31日、韓国のプサンの日本総領事館前で慰安婦問題を象徴する「少女像」の除幕式が大学生や市民団体により行われたことが報じられ、日韓の関係が悪化することが懸念された。その1年前の2015年12月28日に「少女像」の設置について韓国政府は、関連団体との協議などを通じて可能な対応を行い、適切に解決するといった日韓間での合意が得られたにもかかわらず、今回の像の設置はどういった理由で行われたのかについて、日本政府は韓国政府の正統性に疑問を投げかけている（『朝日新聞』2017年1月1日朝刊）。

この報道により、日本人の間には韓国や韓国人に対するネガティブな見方が拡大したことであろう。しかし、ESD（Education for Sustainable Development = 持続可能な開発のための教育）を通してつながっている人々の見方からすれば、一つ一つの報道記事に振り回されることの危うさを察知しているし、これは持続可能な社会の構築を妨害するか、引き延ばそうとすることに他ならないと感づいている。

そのことを示すのが本稿に取り上げる RCE インジェがいかなる ESD の資源を有しているかに関連している。ここでは ESD の発展を願っている人々がスタディツアーに参加して、何を学んだかを通して RCE インジェの ESD 資源を発掘するものである。日本人にとって、一般の韓国ツアーでは全くと言っていいほど旅行対象地にならないインジェの ESD を取り上げ、そのことによって日韓間の友好関係の発展につなげ、日韓双方の国民が持続可能な社会づくりに積極的に取り組むことを期待したい。

第 1 章 北九州 ESD 協議会の韓国とのつながり

韓国人の中では消し去ることのできない歴史的事実である「日帝 36 年の支配」も、第二次世界大戦での日本の敗戦とともに終結を迎え、韓国は「解放」を勝ち取った。しかし、朝鮮人民民主主義共和国と大韓民国の二つの国に国土が分断され、1950 年から朝鮮戦争が始まった。これは、いわば、中国・ソ連と米国といった東西陣営の代理戦争であった。今まで抗日という目標を掲げ、戦ってきた同じ民族が、殺しあわなければならない非情さ、それにより数多くの犠牲者（南北合わせて 400～500 万人）を出すと同時に、今でも解決していない離散家族問題は韓国社会に大きな問題として影を落としている。「漢江の軌跡」とまで言われた韓国の急速な経済発展の裏にはベトナム戦争参戦による米国からの経済的支援・特需があり、1980 年代に入り、80 年には光州市民を軍隊が包囲・発砲するという光州事件に代表される軍事独裁

政権の長期化（民主主義の弾圧）が見られた。1987年によく「民主化」を遂げ、翌年の1988年にはソウルでのオリンピックを経て、世界の表舞台に立ったと言えよう。

この間、日本には韓国情報はほとんど入ってきていない。光州事件は、外国のメディアの取材・報道を遮断し、内部で何が起きているかが知らされなかった。それが「民主化」とともに、1990年代には少しずつ、雑誌やテレビ番組などを通じて情報が入ってくるようになり、2002年の日韓共同でのサッカーのW杯開催は日本と韓国の心理的な距離を決定的に縮めた。それを契機に、関係が良好になり、2004年には「冬のソナタ」やそれに続く「チャングムの誓い（原題「大長今」）」といった韓国ドラマは、お茶の間にいる一般の日本人に韓国社会・文化への親近感をもたらせた。その後のK-POPでは日本の若者の心を奪うほどになっている。他方、韓国内でも、村上春樹や江國香織などの小説が韓国語訳されたり、「日ドラ」やJ-POPがブームとなった（クォン・ヨンオク 2010. 17-19）。この間、日本人の韓国への旅行、逆の韓国人の日本への旅行も増え、韓国語を学習する日本人が増えた。以前に言われた「韓国は近くて遠い国」は過去のものとなった。

そのような状況の中に、2005年に国連（ユネスコ）が「持続可能な開発のための教育（ESD）の10年」を宣言した。国連大学高等研究所の中に事務局が置かれ、ESDを推進する地域拠点（RCE = Regional Centre of Expertise on ESD）が活動しやすいように支援をした（mext.go.unesco/004/004_iesFiles/afieslfile/2009/02/06/1218318_5.pdf, アクセス2016年10月3日）。その際、アジア太平洋地域での中心的役割を担ったのは、RCE トンヨンであった。2006年に北九州ESD協議会が設立され、2007年に同協議会はその当時全体像が見えなかったESDを学ぶことを目的としてRCE トンヨンを訪問している。最初は、北九州ESD協議会に属するアジア女性交流研究フォーラム（当時、北九州ESD協議会の事務局は当団体の中に置かれていた）、翌年には北九州市立大学法学部政策科学科三宅ゼミがトンヨンを訪問し、慶尚大学にて大学生同士の交流を行っている。これらが契機となり、毎年韓国を訪問するようになった。訪問した場所や内容も次に見るように多種多様である。ただし、すべてのプログラムの内容はESDに関係している。時系列でみると、訪問時期・場所は、2009年9月11日～14日には釜山・トンヨン、2010年8月28日～30日 釜山・トンヨン、2011年8月19日～22日 釜山・トンヨン・ウルチュ郡、2013年11月15日～18日 江原道インジェ郡・ソウル市ノウォン区、2014年9月27日～29日 釜山・トンヨンである。（2012年はトンヨンでRCE世界大会が開かれ、北九州から10名が参加している。

その中でも特に印象的だとされたプログラムとして以下があげられている。2009年のトンヨン訪問での慶尚大学との交流会では、当該大学の大学生たちの「空の皿運動（ピングル・ウンドン）」の紹介である。皿の上に料理は残さずすべて食べようといった内容だが、日本であ

れば残さずに食べる（以前はお百姓さんのことを考え、一粒残さず米粒を食べるとまでの躰がなされた）のは当然であるが、韓国ではその作法は異なる。ホスト側のことを考え、「十分ご馳走をいただき、有難うございました」として少し残すのが当たり前の文化である。それにあえて挑戦したのが彼らの運動である。現在の日本の環境省や消費者庁が進めている 3R の食ロス削減運動とも重なり合う。交流会では、* ESD の指導者養成と RCE の運営について、* 漂着ゴミといったテーマで二班に分かれて討論した。この討論は 2011 年にも行われ、* 多文化共生政策、* 高齢化社会がテーマに選ばれた。それぞれの RCE や地域が抱える課題が選ばれている。

2010 年と 2011 年はトンヨンの島々への訪問を行っており、ヨンデ島やゴンリ島がその対象であった。トンヨンは島が多く、ヨンデ島はエコアイランド（プルントンヨン 21 という NGO が計画した）として将来注目される島との理由で選ばれている。ゴンリ島はトンヨン市街地から非常に近く、便利である。同島では慶尚大学の学生たちの指導のもとグリーンマップ（あちこちを歩き回り、環境に配慮した場所、自然の特徴がよくわかる場所などを地図に書き込む）を楽しんだ。2011 年にはウルチュ郡にも足を延ばし、RCE ウルチュの人々との交流を楽しんでいる。ウルチュ郡は、釜山から東北方向に 1 時間半ほど行った自然豊かな地方で、農業が非常に盛んで環境配慮型の農業も行われている。視察したのは信友牧場で、牧場の特徴は循環型であり、訪れる小学生への環境教育にはヤギやウサギといった動物と触れ合い、親しむことで生命の大切さや生物多様性の重要性を理解させるという教育に力を入れている。搾乳はオランダ製の機械により、自動的にされ、牛が自分の番を知っているらしく、次々とやってきては搾乳が終わると元の位置に戻る。飼料は、牧場内の圃場でできるトウモロコシであり、尿尿などがコンポストとして利用されている。牧場には珍しく、環境教育用に木造棟を建て、アイスクリームが作ることができる調理室やプロジェクター付きの教室がある。小学生が集団で、さらには家族連れが来て、距離が遠い割には結構人気がある。酪農業の利益から教育に資金を回すことはなく、教育部門の事業収益だけで教育事業が成立している。

2013 年に出かけたのは江原道インジェ郡である。RCE インジェのあるインジェ郡は北朝鮮に接しており（正確にはインジェ郡は二つの国の非武装地帯で分断されている）、韓国側にある DMZ 警備場所に出かけ、休戦状態にある双方の DMZ 警備の大変さを見学、さらには北朝鮮が掘ったといわれる第 4 トンネルの視察も行っている。第 3 章でも詳しく示すように、「平和と生命」をテーマに掲げて活動しているのが RCE インジェの特徴であり、帰途には、ソウル特別市ノウォン区を訪れ、環境共生型都市の隅々を視察、あちこちに再生可能エネルギーの生産装置が設置されていたのが印象的に残っている。

このように RCE 北九州が行ってきた韓国への定期的な視察や交流は、日本の RCE の中で

北九州だけと言っても過言ではない²。多文化理解はもちろんのこと、特に日本の国民が日韓政府間の外交に振り回されている中、ESDの旗のもとにお互いを理解し、共通する問題を解決することは非常に重要なことである。では、インジェ郡のESDとはいかなるものか、RCEの組織・制度と取り組みを中心に次章で確認したい。

第2章 RCE インジェの組織とESDに関する取り組み

第1節 本章の概要

韓国には、統営、仁川、ウルチュ、インジェ、チャンウォンといった5つのRCE³（RCE：Regional Center of Expertise）がある。その中、本章ではRCE インジェを対象に紹介したい。当該RCEは2015年時点で、世界のRCEの中でも珍しく、「生命」と「平和」を軸に持続可能な社会の構築を目指している。

ここではRCE インジェの2013年から現在（2017年）に至るまでのESD活動の中心軸になっている組織体制を紹介したい。RCE インジェは韓国で生命と平和を守る活動において高い評価を得てきている。しかし、ESD活動の中心に環境を据えている数多くのRCEとは少し異なり、なぜ、生命と平和の双方に着目しているのか、さらには、生命と平和とは、具体的にはどのような活動を意味するのかといった疑問が浮上するが、残念ながら、このような疑問に適切に答えてくれる文献・研究は甚だ少ない。

よって、本章では世界のRCE間の積極的な情報の共有、今後と同様な活動をする地域の活性化への支援を目的としてRCE インジェの目的、組織体制と事業内容について詳しく説明したい。その際、文献調査と現地調査を併用した。まず、文献調査は2013年から現在（2017年）までのRCE インジェが発行した報告書や内部会議の議事録、韓国の文献データベースを中心に行った。RCE インジェの概要を把握し、さらに、組織の変遷を究明した。次に、現地調査については、2013年から現在（2017年）に至るまでに北九州ESD協議会主催の韓国スタディツアーや、筆者と一緒に韓国語を学習する学生とともに出かけたインジェ郡へのスタディツアーにおいて筆者（宋珉鎬）がその企画から実施までのコーディネーターや通訳に携わってきた経緯を踏まえ、現地調査を同時に行ってきた。その際、様々なキーパーソンとの人的ネットワークを築き、彼らから貴重な情報を入手した。最後に、RCE インジェが主催する職

² 各々のスタディツアーの報告書は北九州ESD協議会より発行され、現在、事務所に保管されている。

³ RCE（RCE：Regional Centers of Expertise）は「持続可能な開発のための教育（ESD）に関する拠点の拠点」で、地域社会でESDを実践しているフォーマル・ノンフォーマル教育機関のネットワークである。同ネットワークには、教育を通して持続可能な未来を築くために尽力している教育機関、NGO、博物館、民間企業、地方自治体、その他の団体が含まれている。2014年1月現在、世界各地に127 RCEがある。

員と各委員会の委員を対象にするワークショップや定例会議などに参加し、貴重な意見を得ることができたということも付け加えておく。

第2節 インジェ郡について

インジェ郡は韓国の159市・郡（73市86郡）の中で、二番目に広い面積を持ち、酸素比重が最も高い地域である。地理的に朝鮮半島の生態軸である白頭大幹⁴と非軍事境界線 DMZ⁵が重なり、人口密度は1km²当たり20名に達しない韓国の生態系の宝庫である。全般的に工場が少なく、存在するとしても、第2次産業の食品加工業にほとんど限られており、地域内総生産（GRDP）の50%以上は公共部分と軍の領域である。一日一人当たりの生活廃棄物の排出量が多いことが特徴である。これは軍から排出される生活ごみと一緒になっているためである。ま



(出典：http://blog.naver.com/tnwltkfkd04/220665304317 にもとづいて筆者作成)

図1 インジェ郡の地図

⁴ 白頭山に始まり、東の海岸線に沿って南に流れ、太白山付近から西に傾い南内陸の智異山に至り、韓国の土地の筋骨をなす巨大な山脈の昔の名前。

⁵ DMZ(Demilitarized Zone)の略で、国連軍・朝鮮人民軍・中国人民志願軍が6・25戦争の休戦に合意し南北の間の敵対行為による戦争再発を防ぐために、韓半島の中央を東西に横切って作られた、非武装・非戦闘地域である。

た、インジェ郡は他の農山村地域と同じく都市への若者の流出が激しく、深刻な問題となっている。そのため、労働力の再生産構造が構築しにくい地域である。インジェ郡の位置を図1に示す。

インジェ郡庁は地域の自然条件や社会経済的な条件を考慮して、“平和と生命の基盤、天下したインジェ”としてインジェのビジョンを定め、生態系の復元と保護、有用微生物（EM: Effective Micro-organisms）使用の農法の普及、アドベンチャー型観光、再生エネルギー事業、山地複合農業など自然に基づいた産業発展に力を注いでいる。RCE インジェも同じ方向にある⁶。

インジェ郡は1998年からDMZ 平和と生命の丘センターの建設を提案して2009年教育町を作り、数多くの国内外の学生、市民、平和運動家、生態専門家との教育と出会い場を形成している。平和と生命の丘センターについて少し詳しく説明したい。当施設はDMZ 東北部山岳地帯、内金剛へ最短距離地域（生命平和丘から内金剛まで車で約50分の距離）に位置している。金剛山の1万2千峯の中で南側にある香炉峯（ヒャンロボン）（東側）と加七峯（カチルボン）（西側）の中間の南北の植物生態系が豊富な地域である。その構成は、DMZ 平和と命のキャンプ、教育村、地雷生態公園、生命研究キャンプに分類されている。教育内容は、DMZ 一帯の住民と軍人の現場教育、市民団体、企業の管理職と職員、小・中・高・大学生を対象にした一般教育と指導者教育、地球村の平和教育が中心になっている。また、自然体験や「民統線」⁷の現場教育、農村体験ができる。

「命を甦らせる五行の丘」は、「命の丘⁸」と「五行の丘⁹」のふたつで構成され、人間の効果があり生命を甦らせる樹木、薬草、農作物など300種以上が植えてある。訪問客が労働、教育参加、健康食品の製造実習をするために運営されている¹⁰。

⁶ ジョン・ソンヒョン（2014）、『教育研究情報』「インジェ郡の持続可能発展教育と生命社会」、江原道教育研究院、第65号、71頁。

⁷ 民統線とは民間人統制区域の略語で、休戦ライン一帯の軍作戦及び軍事施設の保護とセキュリティを保護する目的で民間人の出入りを制限する区域である。

⁸ 「命の丘」は頭、腕、肝臓、心臓、脾臓、肺、肝臓から成り立っている。頭は空からの気を受ける通路で、肝臓は体にある毒素を分解するところである。また、心臓は活動と休息を時に合わせて調整するところ、肝臓は食べ物が消化されて体と一つになるところである。さらに肺は呼吸を通して外部と疎通するところで、肝臓は精気を保存するところである。それぞれの体の器官に効果のある植物が植えてある。

⁹ 「五行の丘」は木、火、土、金、水の五つの要素から構成されている。木は中風、自尊心、怒りと関係があり、ここには腎臓の病を治療する植物が植えてある。火は神経症、奉仕、喜びと関係があり、心臓病を治療する植物が植えてある。土は胃腸病、和解、思考と関係あり、脾臓を治療する植物が植えてある。金は肺病、決断、悲しみと関係があり、肺の病気を治療する植物が植えてある。水はむくみ、知恵、恐怖と関係があり、ここには腎臓の病を治療する植物が植えてある。

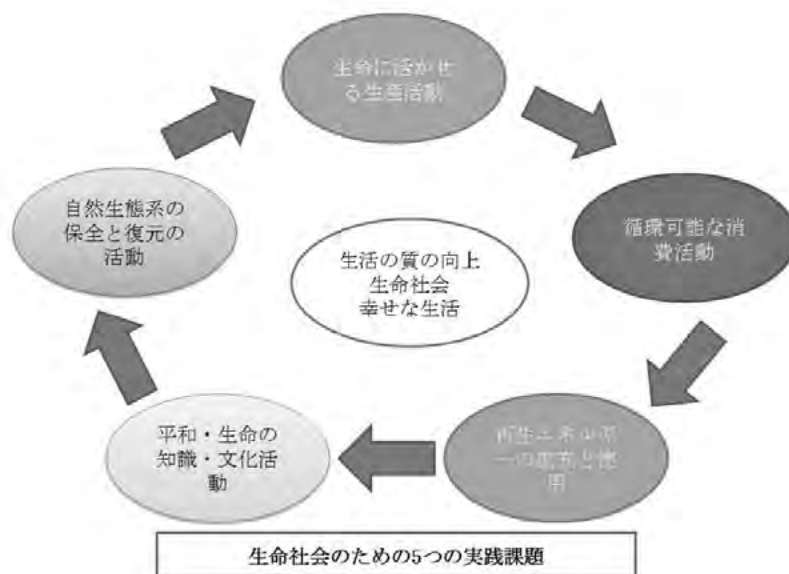
¹⁰ 環境部「命のカギで平和の門を開く」から参照。

第3節 RCE インジェ

RCE インジェ¹¹は、現在の世界を次のように捉えている。すなわち、現在の環境、政治、社会、南北¹²、経済などの問題は危機的状況に陥っており、資本の独占と遮断された社会構造、大量生産・消費・廃棄の文明から生じる各種の社会問題と環境問題は地域や国家を超えて、世界的な危機を招いてきている。これらの問題は、最終的に生命の危機にたどり着く。既存の社会経済の発展方式の限界を克服できる新たな社会、新しい文明を志向しての大転換が必要である。つまり、自然環境保全・正義の社会・経済発展が調和された持続可能な発展が必要である。

インジェ郡は「韓国戦争」¹³時、激戦地となった地域であり、今も南北が対立している歴史の現場である。しかし、軍事的な理由と地理的な位置で自然の生態系が復元された、韓国の中で最高の生物多様性を誇る地域である。また、戦争を平和で、破壊を生命で、対決を協力に変える必要がある 21 世紀の人類が追及しなければならない代表的な象徴を有する地域である。

インジェ郡はこのような価値を住民主体、現場実践、生涯学習、民・官・軍の協力に基づく持続可能な発展教育を通して韓国の中で、最も生命が価値の中心におかれる社会を構築して、全世界に知らせることを目指している。そのようなビジョンは、最終的には持続可能なインジェ生命社会の構築である。実際、生命社会を構築するために5つの実践課題をあげている。



(出典：RCE インジェ 2016 年度会議の資料にもとづいて筆者作成)

図2 生命社会のための5大実践課題

¹¹ 麟蹄郡（インジェぐん）は大韓民国江原道の軍事境界線に接する地域である。

¹² ここでの南北は、南は大韓民国を、北は北朝鮮人民共和国を指している。

¹³ 韓国では1950年6月25日から1953年7月27日に休戦協定を結ぶ。日本では朝鮮戦争ともいう。

1. 生命のためになる生産活動は生産部門の全面的、段階的に生命産業を目指していることである。2. 循環可能な消費活動は節約、ゴミの最小化、リサイクルと循環である。3. 再生エネルギーの拡充と使用は化石燃料の多消費から自然エネルギーの使用への転換である。4. 平和・生命の知識・文化活動は、すべての教育の生命教育の実践である。5. 自然生態系の保全と復元の活動は、生物多様性や豊富さの土台を構築する。これらの内容を図2に示す。

さらに、上記の課題を推進するために、地域別・主体間の生命社会に対する社会的合意、協力網の強化、部分別の拡散を通して地域発展の土台を構築し、未来志向的、統合的な視野を広げて地域住民の持続可能な発展に対する力量の確保、モデル拠点としての域地と団体（学校、市民団体）の発掘と生命社会の実践運動を始めることである¹⁴。

表1 RCE インジェ推進年表

年度	内容
2011年12	地域発展フォーラムで「持続可能な開発のための教育（持続可能な発展教育）」問題提起
2012年2	持続可能な発展教育インジェ専門センター(RCE インジェ)認証推進委員会発足
2012年3	RCE インジェ準備委員会開催
2012年4	UN（国連）傘下国連大学に「RCE 指定意向書」の提出
2012年5	国連大学関係者のインジェ郡訪問とコンサルティング
2012年6	UN 傘下国連大学に「RCE 指定申請書」の提出
2012年7	国連大学訪問
2012年8	インドネシア開催「アジア・太平洋総会」の候補都市に参加
2012年9	「第7回世界 RCE 総会（慶尚南道統営）」に出席
2012年10	日本仙台 RCE 招待特別講演と懇談会
2012年12	UN 持続可能発展教育センター（RCE）を指定
2013年4	UN 持続可能発展教育センター（RCE）を指定宣布式
2013年7	理事会の構成及び運営、学校教育運営委員会構成及び運営（総24名の教師加入）
2013年9	市民教育委員会の構成及び運営（総21の社会団体加入）
2013年9	民・官・軍業務協約（RCE インジェ、インジェ郡庁、12師団）
2013年12	民・官・学業務協約（RCE インジェ、インジェ郡庁、インジェ教育支援庁）

（出典：RCE インジェ理事会の資料とインジェ郡庁の URL から著作作成）

¹⁴ RCE インジェ定例理事会の会議資料より。

第4節 制度と組織体制

RCE インジェは、2012年推進委員会が結成・運営された。10ヶ月間の努力で2012年12月21日に国連大学からRCEに認定され、翌年の2013年1月に公式通知を受けた。公式通報の後、事務局は、RCEの教育活動について地域の住民や諸関係者の家々を直接訪問して説明会を開催した。その対象地域は、1邑5面であり、そこを順回訪問した。行政部門にはインジェ郡庁、インジェ教育支援庁、社会団体などが対象で30回以上の説明会を行った。特筆すべきは、2013年8月インジェ郡にある12師団とRCEインジェが、軍の持続可能な運営のための覚書を締結したことである¹⁵。

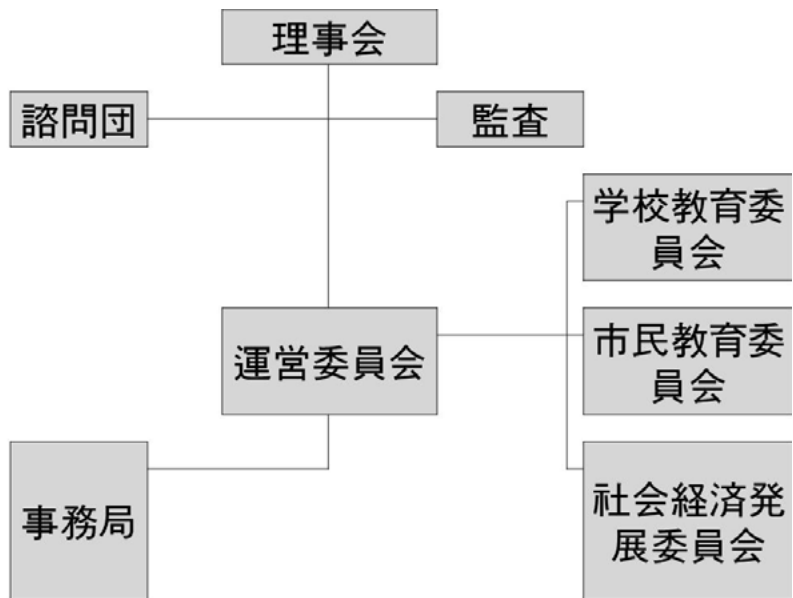
そのようにしてできあがったRCEインジェの組織の特徴は中央集権的組織ではなく、水平的協力網である組織（ネットワーク）である点である。事務局¹⁶は、個々の組織と水平的協力網である組織がよく動くようにサポートをする役割で、運営に関わるすべての決定は、理事会が行い、その執行は、学校教育委員会、市民教育委員会、社会経済発展委員会の代表者で構成された運営委員会が担当する。財政は年2億ウォン全額インジェ郡庁が支援している。まだ初期の段階、かつ、未熟な段階であるので、困難なことは多い。その中で最も切実なのは人材不足である。理事会と各種委員会に参加している委員は完全にボランティアであり、彼らは会議手当もなく、本職を有している委員にいかに参加してもらえるかが難しい。2013年の組織体制を図3に示す。

RCEインジェは理事会をはじめ、運営委員会、学校教育委員会、市民教育委員会、そして事務局で構成されている。まず、理事会は、インジェ郡の持続可能な発展の全般的な方向を提示し、年2回会議を開催する。構成員は理事長と9人の理事である。理事長は韓国DMZ平和生命丘の理事長で、理事はインジェ生命社会実践運動の会長、インジェ学校運営委員会、インジェ文化院、インジェ郡首、江原道インジェ教育支援庁、12師団、大韓老人会インジェ郡支部、インジェ郡議会、インジェ郡女性団体協議会である。また、監査はインジェ郡議会、インジェ郡諮問会になっている。

次は、運営委員会である。当委員会の役割は運営委員会の会議開催と理事会からあがってくる案件の最終審査を行うことである。会議は年に1回開催される。さらに、学校教育委員会は、持続可能な発展教育を理解して、その内容を教育現場に取り入れる自発的な仕組みを構築することを目的としており、学校・学生に関連する持続可能な発展教育の方向と事業を話し合うた

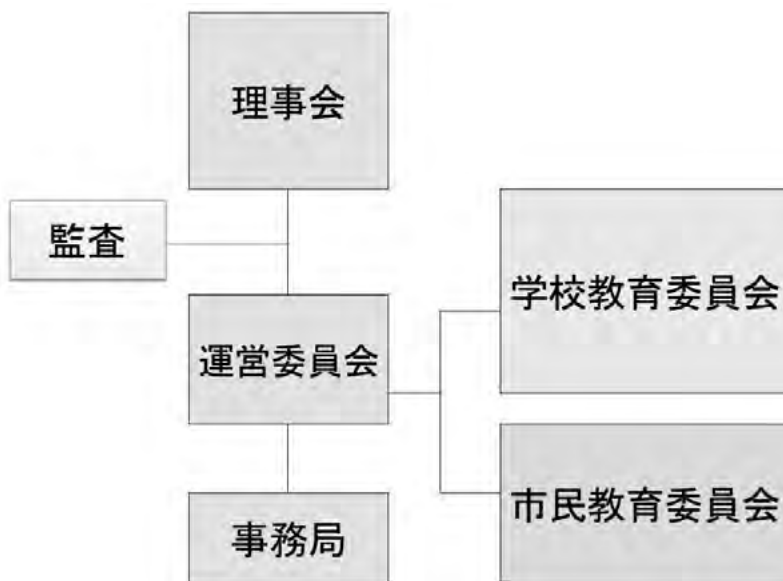
¹⁵ ジョン・ソンヒョン（2014）、前掲書、71頁。

¹⁶ 2017年現在、事務局の構成員は、局長、部長、代理三名である。事業の全般を管轄するのは局長で、部長は主に生活・文化活動を担当し、その他は代理が軸になって、学校教育や市民教育及び社会経済に関して担当している。



(出典：RCE インジェ 2016 年度会議の資料にもとづいて筆者作成)

図 3 2013 年 RCE インジェ組織図



(出典：RCE インジェ 2016 年度会議の資料にもとづいて筆者作成)

図 4 2016 年 RCE インジェ組織図

めに委員長をはじめ、（執行部）運営委員 5 名と委員 24 名で構成されている。その活動内容はウルチュ郡の持続可能な発展教育の指定研究学校の見学、運営会議及び持続可能な発展教育の説明会、教育プログラムの運営のためのワークブック作成のための協議などである¹⁷。市民教育委員会は 2013 年 9 月に発足し、その構成員は 22 団体の実務者を中心になっている。その中でインジェ文化院の事務局長が初代の委員長として選ばれた。

しかし、現在（2016 年）、組織構成に変化が生じている。新たな組織構成を図 4 に示す。大きな変化は既存の諮問団がなくなり、社会経済教育委員会は別に法人化して独立している¹⁸。

第 5 節 RCE インジェの事業内容

RCE インジェは、教育を中心にインジェ郡自然生態系の保全、正義、平和な社会の実現と住民の生活の質を向上させる手段としての経済発展など 3 つの要素の調和とバランスを確立しようとするものであり、このような目標を達成するために、今後 10 年間（2014～2023 年）3 次にわたる計画的かつ組織的な実践運動と事業を推進することを決定した。その内容を表 2 に

表 2 RCE インジェ 10 年計画

段 階	期 間	主な内容
土台の形成期 (1 次 3 ヶ年 事業計画)	2014~2016	生命社会の実践計画を樹立し、実践とそのための人的・物的土台を構築
調 整 期	2017	事業計画の成果、反省、評価さらに新たな推進動力を点検し、今まで確保した住民の積極的な同意と参加を組織化する時期
成 長 期 (2 次 3 ヶ年 事業計画)	2018~2020	インジェ生命社会の実践運動と事業の 6 つの邑・面 84 の村と、業界全体への波及を組織・実践する時期
発 展 期 (3 次 3 ヶ年 事業計画)	2021~2023	インジェ生命社会の実践運動と事業の画期的な発展に重大な産業の振興、消費部門におけるリサイクルの全面化、エネルギー自立の大幅な向上、生活文化、社会正義、生活の質の向上を住民が主体となって作成する段階、6 邑・面 84 の村と業界全体への波及を組織・実践する時期

（出典：2016 年事業報告書から著者作成）

¹⁷ リ・スクジャ（2014）、『教育研究情報』「インジェ生命社会のための持続可能な発展教育（ESD）の始まり」、江原道教育研究院、第 65 号、121 - 122 頁。

¹⁸ 2017 年 RCE インジェ担当者からの聞き取り調査による。

示す。

事業の目標は、まず、地域と部門の中核的人物の発掘・育成、第2に、民・官・軍と地域との協力網（ネットワーク）の構築・運営、第3に、インジェ生命社会の発展計画とインジェ郡民との合意、第4に、模範拠点の町や団体（学校、社会団体など）の発掘と実践事業の開始、第5に、組織運営の形式と内容の定着、最後に調査・研究に関する能力を強化することである。

このような事業の目標を達するするために5つの部門にさらに分類した。その内容を表3に示す。

これに従って、RCE インジェは、持続可能なインジェ生命社会を構築するために多く、未来、地域、生命、3つの分野に区別して事業活動を行っている。まず、未来の働き手を育てるインジェ、次に地域の中核人物を育てるインジェ、最後に生命に有益な生活方法への切り替えと実践である。具体的な内容を表4に示す。

表3 部門別の事業

部門別	内 容
組 織	住民主体で参加・運営する自主公論の場であるハプガンフォーラムと持続可能な開発の様々なトピックを学習する学習室、適正技術を学習する勉強部屋の運営、さらに、文化においては地域別（瑞和、新南、ウォルハク、インジェ）に文化の集い・活発な運営とこれらの量的・質的な組織の形成。
教 育	市民教育は定期的な講座をもとに、持続可能なインジェ郡の発展に対する認識を拡散して地域の指導者を対象とした教育を実施する。 学校教育は、幼稚園から高校生まで対象が多様化し、教育の頻度も増加する。特にユネスコ学校に特化している。 軍人教育は、第3工兵旅団と業務協約を結んで第125工兵大隊を中心に、部隊内の適用可能な適正技術を試験的に実施。
実 践	温室効果ガスの増加に伴う気候変動についての学習をもとに、学校に試験的にその重要性を知らせる活動を実施して、持続可能な発展をテーマに、学校との関係を構築（インジェ中学校、ギリン中学校、サンナム中学校） 生命の種子を生かす住民と分かち合いを通じ、今後、インジェ郡の地元種子に関する活動。
文 化	教育対象は地域別、年齢別に多様化と定期的な集い、各種の祭りに文化活動を活発に促す。
広 報	光復節（8月15日）の記念行事、持続可能な発展フォーラム、各種祭り、大衆広報物、ハプガンニュースレター、SNS（ブログ、YouTubeの）を通じてインジェ郡内外にインジェ持続発展センターの活動と持続可能な開発の必要性について知らせるための努力。

（出典：2016年事業報告書から著者作成）

表 4 RCE インジェの事業の内容

未来の働き手を育てるインジェ		地域の中核人物を育てるインジェ	生命に有益な生活方法への切り替えと実践	
持続可能な学校づくり	平和・生命特化教育	生命社会のための地域の中核人物養成	生命社会のための住民実践運動	生命社会のための住民主体の組織運営
持続可能な発展教育の拡大				
訪ねて行く持続可能な発展教育	DMZ生物圏教育	インジェ生命社会の定期講座	適正技術教育と制作	インジェ生命社会実践運動
自然エネルギー体験教育	DMZ生態・文化・歴史探訪	インジェ生命人文・社会科学講座	生命の種（在来種）分かち合い運動	生命社会の土台構築10年構築のための公論場の形成
持続可能な発展教育キャンプ	安全な食卓づくり	インジェ郡地域指導者深化教育	生命を生かす美しい河川造り	住民主導型生態調査団の運営
持続可能な発展のための教師の職務研修		軍人教育	生命を生かす生ごみ減量化運動とコンポスト	
学校教育の他の教育関連関係者の教育		生活文化など	EMを通しての親環境洗剤普及運動	
インジェ郡持続可能な発展教育のワークブック制作			瑞和平和町新聞製作	
ユネスコ学校活動				
ユネスコ国際ワークキャンプ			加兒2里モデル町発展計画樹立	
アフリカ及びアジア太平洋の教師と一緒にする国際理解教室			適正技術勉強部屋	
ユネスコ日本文化交流			持続可能な発展勉強部屋	
ユネスコ世界文化遺産探訪				
インジェ・歴史・地理・生態探訪				

（出典：2013年、2014年、2015年、2016年事業報告書から著者作成）

このような活動は国内で高い評価を得ている。例えば、2016年全国地方自治体長マニフェストのベスト・プラクティス・コンテスト¹⁹の住民参加の分野で最優勝を受賞した²⁰。また、生徒たちの活動の中、生命の種（在来種）分かち合い運動は韓国4-H²¹主催の全国大会で入賞し、様々なマスメディアで紹介された²²。RCE インジェと新南高校は、4月ウォルハク1リーネットガン²³村と業務協約を締結し、地域住民は生徒を対象に農業を指導して育苗場の支援を協議した。参加した生徒は昨年毎週土曜日にネットガン村で野生の花、雑穀、野菜など約55種の在来種を播種し、農作業計画、道標の立て、環境に配慮した肥料作りなど、様々な活動を計画・実施した。また、今後の地元の種子を使用、直接農業をして収穫した農産物を地域の困っている人に配って、収穫した種子は、地域の祭りなどを通じて地域住民に提供した。さらに平和教育の一環で行っている国際理解教育は、韓国ユネスコや北九州ESD協議会との国際交流を通して活発に行っている。特に北九州市との交流は2013年から高校生・大学生、一般市民、行政を含めて幅広い交流を行ってきている。確かに教育プログラムの内容、教育の回数、さらにその対象が増加しており、質的にも徐々に改善されていることが明らかになった。具体的な該当RCEの教育実績を表5に示す²⁴。

表5 3年間の教育実績

部門別	2014年	2015年	2016年
教育プログラム	26個	36個	44個
教育回数	156回	290回	653回
参加人	751名	1,671名	1,792名

(出典：2016年事業報告書から著者作成)

¹⁹ 持続可能な教育のためのネットワーク構築、生命社会実現のための住民意見の収集、持続可能な学校づくり、生活、社会のための地域中核指導者養成、生命社会のための住民実践運動、住民主導型持続可能発展教育の展開などの事例発表が行われた。

²⁰ CNBニュース <http://www.cnbnews.com/news/article.html?no=329388> 2017年1月14日にアクセス。

²¹ 4-Hとは、明晰な頭[Head、智育]、忠実な心[Heart、徳育]、勤勉な手[Hands、労育]と健康な体[Health、体育]を意味する4種類の理念[4-H]を指す。韓国では、これらの単語の意味を、それぞれ（智）、（徳）、（労）、（体）に翻訳して使用している。4-Hの動きは、国の将来を担う青少年を「4-H会」を通じた団体の活動で、（智）、（徳）、（労）、（体）の4-H理念を生活の中にとりこむことにより、人格を形成し農心を培養し、創造的、未来の世代に成長を目指す地域社会の青少年教育運動である。4-Hの動きが他の青少年運動と異なる点は、農業、環境・生命の価値を創出し、青年農業者4-Hのメンバーの場合、農業と農村社会を導いて行く専門農家としての資質を培養することである。したがって、青少年の教育が知育、徳育及び体育に力点を置いているのに対し、4-Hの動きは農業教育を追加して、現場の教育と実践課題などを主なプログラムにしてる。韓国4-H本部 <https://www.korea4-h.or.kr/>より。2017年1月14日にアクセス。

²² 江原日報 <http://www.kwnews.co.kr/nview.asp?s=201&aid=216051300081> 2017年1月14日アクセス
国際ニュース <http://www.gukjenews.com/news/articleView.html?idxno=479718> 2017年1月14日アクセス
ニューシス http://www.newsis.com/ar_detail/view.html/?ar_id=NISX20160515_0014084826&cID=10805&pID=10800 2017年1月14日アクセス。

²³ 韓国語の表記では일학1리 냇강마을である。

²⁴ 参加人数の数字は述べの数字ではない。また、各種のイベントでの自転車発電を体験した人は1,941名である。

第6節 小 括

韓国では5つ（統営、仁川、ウルチュ、インジェ、チャンウォン）のRCEがある。ここでは生命と平和を軸に持続可能な社会の構築を目指しているRCEインジェを対象に何故、当該RCEでは生命と平和に注目しているのか？ また、どのような活動を行っているのか？に関する疑問点から世界のRCE間の積極的な情報の共有と、今後少しでも同じ活動を行っている地域の活性化をもたらすことを目的として、第1にRCEインジェの全体の概要を明確にすることと、第2にRCEインジェの組織の持続的な活動や事業の内容の把握を試みた。

その結果、まず、何故、RCEインジェでは生命と平和に注目しているのかに関しては該当RCEの地理的な条件と該当RCEの設立背景や実践課題については、図1、表1、図2を用いて明確に説明できた。さらに、どのような活動を行っているのかに関しては 制度と組織の変遷に関しては 図3と図4で、また事業活動に関しては、表2、3、4、5で課題を明確にした。

特に、少人数の事務局員の構成で制度的な位置づけや教育プログラムの内容、教育の回数、さらにその対象が増加しており、質的にも徐々に改善されていることが明らかになった。一方、以下のような課題が残っている。まず、制度的な位置づけができたとは言え、現在の財源は郡からの補助金で賄っていることを指摘せざるを得ない。現時点では10ヵ年計画の中、初期段階であることを考慮すると止むを得ないことであると思うものの、いずれか自立性を考えなければいけないことである。

次に教育プログラムの内容である。現在は学校の教育プログラムやユネスコスクールに関する教育内容に頼っている。もう少し非正規教育におけるプログラムの開発と地域住民の積極的な参加を促す必要がある。最後に事務局の体制である。事務局は3名の構成で事業・活動を行うことになっている。しかし、教育や事業では、ほとんど一人の職員が担当していることが明らかになった。もっと組織内の構成員間の連携性と地域の人材との連携性を構築する必要がある。

第3章 韓国インジェ郡へのスタディツアーと参加者による学びと評価

第1節 インジェ郡へのスタディツアーの内容

前述したように、北九州ESD協議会では韓国との交流を毎年のように行っており、訪問地も日本人をはじめとする外国人が参加する一般旅行観光地ではない。数多くの訪問で今回はインジェ郡を対象にしたが、企画者（宋珉鎬と三宅博之）がどのような視点に立って旅行内容を決定していたのかを紹介したい。

RCEインジェは、前章で見たように「平和」と「生命」を前面に押し出し、それを数々の

教育プログラムにて追及している。それとは別に企画者自らがインジェ郡内にある ESD の資源を RCE 担当者から事前に紹介してもらい、プログラムにしたものもあった。

まずは、プログラムの内容を見てみよう。大きくは、*自然体験、*社会・文化体験、*ESD 施設視察に分かれる。エコ・自然体験には、農作業でのサツマイモ掘りとロケットストーブ利用の根菜類の煮付け及び景勝地での薬水・紅葉刈り、インジェ郡社会・文化体験にはインジェ郡民族文化博物館訪問、食堂での郷土料理作りの聞き取りと飲食及び太鼓叩き・歌唱練習、ESD 施設見学では、北朝鮮との国境にある軍事展望台・北朝鮮建設の第 4 トンネル、平和・生命の丘博物館が見学地としてある。あとは、高校生・大学生や徴兵制召集の軍人との交流である。

第 2 節 参加者による学び

今回の参加者は、4 人が大学生、2 人が 60 代以上の ESD を熟知している人々である。韓国への渡航回数から見れば、1 回が 2 人（大学生 A と B）、3～4 回が 3 人（大学生 C と D、シニア A）、5 回以上が 1 人（シニア B）となっている。。この年齢と韓国への渡航回数を基準にすれば、3 グループにわけられる。第一のグループは大学生で、渡航回数が一回のみという大学生グループ（ただし、一人はオーストラリアへの留学経験あり）、第二のグループは大学生で、渡航回数は 3～4 回（大半がスタディツアーに参加）、第三のグループは年配で渡航回数が 4 回以上と多いグループである。

韓国に行くにあたって何かの情報源から情報を得たかの質問について、一人を除いて他の者は少ししか事前情報を得ていなかった。どのガイドブックを見てもインジェ郡に関する情報はほとんど出ていない。あえて言えば、韓国の名峰と言われるソラク山に情報は限定される。各自の関心ある分野については文化が 3 人、歴史 2 人、経済全般 2 人、政治 2 人、社会 2 人、農業 2 人、料理 1 人（2 つまで選択可能）となり、参加者の関心はかなり散らばっているのが分かる。

では、それぞれのプログラムで何を学んだのかを見てみよう。先の自然体験分野、社会・文化体験分野、ESD 関連施設見学分野に分けて紹介したい。エコ・自然体験分野では、ソラク山麓の紅葉刈りと薬水の飲用、さらにはサツマイモ掘りとロケットストーブを使った調理である。これは新南高等学校の（ユネスコ）環境サークル所属の女子高生と一緒に楽しんだ。当該地に行くまでのバスの中ではお互いが非母語の英語で話しあう機会を設けた。前者については、韓国の中でも寒暖の激しい江原道には紅葉の景勝地が多くあり、普段北九州では見ることができない紅葉の美しさを視覚で感じ、同時にその中にある湧水箇所で様々な病気に効くと信じられてきた水（薬水）を長い行列に並びくみ上げ、味覚で感じることで自然の不思議さやすばら

しさを理解することが目的とされている。これについての評価は、四段階評価で「とてもよかった」が4人、「まあよかった」が2人であった。その理由として、シニア二人は、「自然の美しさには国境はなく、日本と韓国同じ空の下でつながっている」、「日本と同じような気候であり、安心感を覚えた」との回答のように、日韓の紅葉を鑑賞するという習慣・感性の類似性・同一性を感じ取っている。大学生の回答は、「思った以上にきれい」「韓国では紅葉の鑑賞目的で旅行する日本人は少ないので、貴重な体験である」と述べている。しかし、企画者側が、ソラク山国立公園の植生やあちこちにある薬水源についての適切な説明をしていなかったことで、「解説があればもっと良かった」（大学生）などの意見も出されている。

後者は、日本と同じく少子高齢化といった問題、特に農村においては過疎化＝限界集落の問題が韓国でも大きな問題になっていることに関連している。大学進学率が8割と日本より圧倒的に高い韓国では、首都のソウル、またはその近郊の都市に居住する傾向が際立って高い。よって、雇用業種や雇用機会の少ない農村に帰る若者は非常に少ない。韓国でも近年、農村の過疎化を防ぐために「村おこし」事業計画が実施されている。インジェ郡も同様で、このスタディツアーの中にも取り入れたプログラムが、農村センターでのインジェ郡の農村の社会経済状況の説明を聞き、その一つとして学習センターが建設され、学習機会を提供していることの原因を理解した。そのうえで、有機農法で育てたサツマイモを掘り、ロケットストーブを使って女子高生と一緒に調理をする体験プログラムである。参加者の感想を紹介すると、「地方の高校生と触れ合う良い機会であり、彼女たちは率直で純粋である」（大学生）にみられるように、他の者も、高校生がハツラツとして元気に活動をしていたこと、堂々として話をしていたことに驚かされている。同時に、「農業体験、特にあのような方法で煮て（筆者注：ロケット・ストーブ利用）食するという経験はフレッシュに感じた」（シニア）「協働で作ったラーメン、おでんや餅料理の味はとてもおいしく記憶に残る」（シニア）体験ロケットストーブを使ってのエコクッキング法に感心しているようだった。逆に、農業についての事前勉強をしていなかったこと、時間の関係で掘ったサツマイモが一本食べられなかったことに後悔を感じている大学生もいた。

次の社会・文化体験分野には高句麗時代の騎馬術を教えた音楽の練習がある。具体的には、大声で歌を歌いながら太鼓をたたき、時には踊るといった体験である。平和・生命の丘センターのスタッフが担当している。これも女子高生と一緒に行ったが、太鼓は一人ひとりにあてがわれたので、一緒に何かを作るといったことはない。しかし、合同演奏なので、最終的に協調性が重要になってくる。高句麗時代の騎馬の姿に思いをよせ、最初はゆっくりとしたリズムで弱くたたきながら、馬を早く走らせるために中から大に音量を上げだすものである。その間に、詞のあまりない歌を唄いながら簡単な踊りを舞う。このプログラムについては、「迫力があり、面

白く、伝統文化から平和教育につなげること、朝鮮文化への誇りを感じること」(大学生)、「力が必要でリズム感が試されるものだと知らず、とてもハードだった」(大学生)、「初めて太鼓をたたいたが、同じリズムで叩くのは難しかった」(大学生)、「感動した。初めての体験だが、韓国を身近に感じることができた」(大学生)に見られるように、普段の音楽の中で扱うことのない楽器=太鼓に触れ、迫力を感じながら、高句麗の騎馬になりきるように叩いていく。その難しさを感じながらも韓国の伝統を理解しようとしていることがうかがえる。シニアの場合、「伝統芸能の体験は貴重で、体の中から絞り出す声と太鼓とリズムが相まって参加者の一体感を生み出していた。音楽に国境はない」(シニア)、「参加した全員が音や体の動きを同一に体験することで一体感が取れ、人との距離が短くなり、相互理解が進めやすくなる。楽しむのが第一義であるが、平和構築のよい手段になる、その方法を教えてもらった」(シニア)といった意見から、参加者が感性・情熱的に韓国の伝統を理解し、一体感を共有できる、また、日本での今後の取り組みを成功に導く参考材料の提供という重要性を指摘している。

ESD 関連施設見学は、平和生命の丘センター (RCE インジェの事務局が置かれている)、インジェ郡民族文化博物館、乙支展望台と第4トンネルである。また、平和学習という意味では、合河亭という二本の川の合流地点にある公園での祝祭の警備・管理に当たっていた若い軍人との話し合い=交流機会を設けた。

平和生命の丘センターでは理事長の話聞いた。同センターは、平和と生命に関する学習を目的とした施設である。宿泊施設、ホール、講堂、会議室、図書館、食堂があり、朝鮮戦争に関わる写真やインジェ郡の動植物写真が飾られている。外には果樹や野菜類が植えられており、すべて有機農法で栽培されている。理事長の思想・信念を反映して、五行といった東洋思想に立脚した植栽が施されている。インジェ郡民族文化博物館は、インジェ郡の農山村の生活が主に紹介された建物である。1960年以前のインジェ郡の農山村の産業、特に農業についてのジオラマ展示、写真や実際の農機具、生活道具や食事内容の展示がなされていた。平和学習としては乙支展望台と第4トンネルの見学が最適である。というのも、展望台と言っても、38度線を挟んでの休戦ラインの韓国側に設置され、韓国軍人が常駐して北朝鮮側を監視している。徴兵制度によって任務についている若い軍人が展望台の役割を説明する。板門店と異なり、ここにはほとんど外国人観光客は来ない。韓国人だけである。緊張感があるかと言えば、北朝鮮側はほとんど建物がない状態で山が続いているだけなので、緊張感はあまりないと言ってもよい。むしろ、第4トンネルのほうが、北朝鮮側が掘ったというトンネルの中をトロッコで見学、臨場感を味わうことができる。脱北者の通告によってこの存在が分かったと言われている。ちなみに、展望台では北朝鮮側の風景の写真を撮るのが禁止されており、トンネルでは中の写真撮影は禁止されている。

参加者には平和生命の丘センターと民族文化博物館見学を通しての学びについて質問をしていないが、平和学習関係の施設（展望台とトンネル）見学についての質問は行った。その回答を紹介したい。軍事施設としての展望台の印象について、予想していたのと同じか、それとも違っていかといった設問では、同じとの回答者が3人、違ったが2人であとはわからないであった。違ったとの回答の理由は、「想像していたよりも観光地化しているが、緊張感もあり、そのギャップに驚いた。」北朝鮮側には山々が広がっており、軍事施設や兵士が見えるわけではないこと、また、韓国の高齢者たちがソラク山への登山を楽しんだ後、観光気分で数多く押しかけ、禁止されているにもかかわらず、スマホで北朝鮮側の写真撮影を行っていたことなどの理由でそのような緊張感のなさを感じ取ったと言える。しかし、他の参加者のトンネルに関する意見では「脱北者の通告による発見ということを知り、緊張感が非常に増した。警備の厳重さに驚いた」とのことであり、同じ光景を見ても感じ方には違いがあることが分かる。

第3節 ESDの学びと異文化理解の視点から

上記のスタディツアーはRCE北九州（北九州ESD協議会）によって企画され、RCEインジェがその受け入れ側になり、両者間の話し合いで最終的に様々なプログラムが決定された。各参加者がスタディツアーで何をどの程度学んだのかは簡単に前節で紹介したが、少なくともNGOのスタディツアーにおいて参加者の学びが成立するには藤原孝章・栗山丈弘は、渡辺恵が以前あげた4つの契機（*参加性：参加者による学習課題の設定、現場スタッフによる学習支援、*状況性：机上の知識ではなく実践されている活動の現場における文脈の知、*関係性：参加者間、現場スタッフなどの関係に由来する、その都度創られていく「動的情報」としての知、*連結性：学習経験の転移、動的情報の他の場所へのつながり）を組み込んだプログラムづくり（カリキュラム）が必要であると述べている。また、双方のRCEが合意の上で本ツアーが組まれたことを考えると、ESDの視点がきちんと踏まえられ、参加者にどのようにそれが理解されたかが問われてくる。ここでESDの視点と言ったが、国立教育政策研究所はESDの要素（持続可能な社会づくりの構成概念）として、*多様性：社会は多様な事物からなりたっている、*相互性：社会は物や人が関わりあって成り立っている、*有限性：社会をなりたさせている資源やエネルギーには限りあること、*公平性：持続可能な社会は権利の保障や恩恵の享受が公平である、*連携性：持続可能な社会は多様な主体が状況に応じて互いに協力することで構築される、*責任性：持続可能な社会は一人一人が責任と義務を自覚し、行動することで構築されることといった6つをあげている。

スタディツアーのプログラムを組む際には、RCEインジェが持つESDの諸資源を活用したプログラムの中で、参加者ができるだけこのESDの要素を学習・理解できるようにと企画者

側は考えていた。参加者は最初に触れたように ESD に関しての初心者ではなく、それぞれの部門で活動している者たちである。ただし、日本の ESD は地域性には重点を置くが、国際性の取り組みが弱いと考えられる。したがって、韓国という社会文化的背景が異なる地に身を置き＝国際性の素養を身につけながら、ESD を学ぶということが本スタディツアーの趣旨である。

では、RCE インジェのプログラムからどのような ESD の要素を学んだのか、それを参加者の意見・感想から拾ってみたい。まず、大学生 A は韓国への渡航歴が一回である。よって韓国の現況をあまり知らないで、抱いていた韓国のイメージと日本に帰国後の姿勢が次のようになっている。「環境問題の取り組みは日本が進んでいると考えていたが、韓国政府の有機農業への支援金制度が先進的であることに驚いた。韓国の急激に変わる過程の中で先進的な取り組みも出てきてもおかしくはない。さらに、理事長の話の中での環境への取り組みだけでなく平和問題に同時に取り組まなければ持続可能な社会は実現できないということに納得、日本の加害責任については日本にいるとすでに終わった問題として考える機会もなく、韓国、北朝鮮の歴史を学んだり、意見を持ったりすることを私自身が避けてきたのかもしれないと感じさせられ、今後はそのテーマに向き合っていきたい。」ここには、有機農業が循環型社会を保障し、今日では韓国のほうが率先してそれを追求しているという韓国社会が、慣行農業のままでは農業が継続できないという有限性を認識していることを理解し、持続可能な社会には環境と平和が関係しているという連携性の発見、さらに日韓間の外交関係悪化の原因の解明を他人に任せることなく、自らも解明しようとする主体性や責任性の重要性を学んでいる。

次に、大学生 B はこのツアーが個人では体験できないことが体験でき、問題が起きた際はコーディネーターや他の参加者にも協力してもらい、解決した、すなわち、連携性や協調性を学ぶ一方で、「韓国語をうまく話せなかったが、意思の疎通を互いに取ろうとするため、わかり合うことができた」といった韓国語と日本語といった多様性の中でのお互いが分かり合おうとする相互性・責任性を学んでいる。大学生 C は、高校生との会話の中でコミュニケーション力の未熟さを痛感し、韓国語が話せる必要性を知り、学ぶ姿勢を示している。「ここで学んだ環境や平和について今後の活動で活かしたい」と、今後も ESD として繋がっていききたいといった連携性と、活動を帰国後も行うといった主体性・責任性の重要性を学んでいる。

シニア A は、それぞれ「持続可能な社会づくりのためには人間と人間、国と国の平和な関係が基礎になることを学んだ」と述べているように相互性や連携性を学んでいると言える。他方、シニア B は、「根本的な韓国のイメージは変わらないが、ある程度理解は深まった。さらに、様々な分野も勉強したい。参加者に宿泊所の掃除を提案したら、気持ちよく参加してくれた。」との意見を述べ、協力しての掃除といった連携性と責任性の重要性を再確認している。

このように見てくると各参加者は、韓国でも ESD の要素を学ぶことができたことが確認さ

れた。これを RCE インジェ側から見れば、外国人の参加者が ESD を学ぶことができるほどの諸資源を有していることを示している²⁵。

おわりに

「国連持続可能な開発のための教育の 10 年（2005-2014）」は終了したが、現在は、持続可能な開発目標（SDGs）に引き継がれ、その中の第 4 目標には、すべての人に対する包括的、公正かつ良質な教育の確保、生涯学習の機会促進と書かれている。これは、方向目標であり、いかに到達目標を設定するかは今後の議論に任せるが、まさしく ESD と連動して出されたものである。この目標を達成すること、達成しようと努力することが持続可能な社会の構築につながる。

本稿では、日韓の外交関係が悪化している状況下、RCE インジェは 2012 年に国連から RCE の認証を受け、平和と生命に関する自らの ESD を展開してきていることをまず述べた。筆者には、ESD が発展する限り、外交上の関係悪化も表面的なものにしか見えない。というのも、韓国には脈々と日本人や日本社会を信頼している人々がたくさんいるからである。それは ESD 関係者に聞けばわかることである。インジェにはどのような ESD が展開されているのか、それをスタディツアーという方法、特に参加者の事後意見を参考にしながら確認してきた。韓国江原道インジェ郡は「DMZ（非武装地帯）平和と生命の丘」を中心に様々な ESD の取り組みが行われている。北九州 ESD 協議会（RCE 北九州）との交流もその一つである。相互交流を通じて、お互いの ESD を理解し、影響力を持ち、持続可能な社会を作りたいものである。

参考文献

- * クォン・ヨンソク、2010 年、『韓流』と『日流』—文化から読み解く日韓新時代』NHK 出版、270 頁
- * 北九州 ESD 協議会 10 年のあゆみ編集委員会、2016 年、『地域と地球の未来へ！北九州 ESD 協議会（RCE 北九州）10 年のあゆみ 2006-2016』北九州 ESD 協議会
- * 平成 26 年度 環境省「持続可能な地域づくりを担う人材育成事業」全国事務局・地球環境パートナーシッププラザ（GEOC）、2015 年、『平成 26 年度版 持続可能な地域づくりを担う人材育成事業 地域版 ESD 環境教育プログラムガイドブック』環境省 76 頁

²⁵ 2017 年 3 月上旬に筆者（三宅と宋）はインジェを再訪した際、新規就農者の参入による有機農業の拡大、健康指向の特産物（オミジャ、ブルーベリー、梨、雑穀やファンテ＝干しダラ）の生産の増加などを発見、これらも教育的要素を加えれば、ESD として位置づけることができる。

- * 藤原孝章・栗山丈弘 2014年6月 「スタディツアーにおけるプログラムづくりー『歩く旅』から『学ぶ旅』への転換」
- * RCE インジェ定例理事会の会議資料
- * RCE インジェ 2013年度事業報告書
- * RCE インジェ 2014年度事業報告書
- * RCE インジェ 2015年度事業報告書
- * RCE インジェ 2016年度事業報告書
- * 環境部「命のカギで平和の門を開く」
- * ジョン・ソンヒョン (2014) 「インジェ郡の持続可能発展教育と生命社会」『教育研究情報』、江原道教育研究院、第65号、61 - 73頁。
- * リ・スクジャ (2014) 「インジェ生命社会のための持続可能な発展教育 (ESD) の始まり」『教育研究情報』、江原道教育研究院、第65号、116 - 128頁。
- * インジェ郡庁 <http://www.inje.go.kr/portal/main/index.htm> 2017年1月14日アクセス
- * 韓国4H本部 <https://www.korea4h.or.kr/> 2017年1月14日アクセス
- * 江原日報 <http://www.kwnews.co.kr/nview.asp?s=201&aid=216051300081> 2017年1月14日アクセス
- * 国際ニュース <http://www.gukjenews.com/news/articleView.html?idxno=479718> 2017年1月14日アクセス
- * CNB ニュース <http://www.cnbnews.com/news/article.html?no=329388> 2017年1月14日にアクセス。
- * NEWSIS http://www.newsis.com/ar_detail/view.html/?ar_id=NISX20160515_0014084826&cID=10805&pID=10800 2017年1月14日アクセス